



被災地復興活動における女性の役割とジェンダーの脱構築の方法をめぐる課題

松岡, 広路

(Citation)

神戸大学都市安全研究センター研究報告, 27:68-80

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482521>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482521>



被災地復興活動における女性の役割とジェンダーの 脱構築の方法をめぐる課題

Issues on the role of women and ways of deconstructing gender in
reconstruction activities in the disaster-affected area

松岡広路
Koji Matsuoka

概要: 本稿は、東日本大震災発災直後からの地域の復興活動への関与観察を通して、ジェンダーの観点で復興支援活動の課題とその解決のための実践的方策について考究するものである。岩手県大船渡市赤崎町の支援活動から得られた知見をもとに、女性の役割と排除の現実を整理し、ヴァナキュラーなジェンダーの復権と再構築を生む支援原理の必要性を説く。自らの実践への批判的検証を通して社会教育研究の最新の学習論である「当事者性の交差・邂逅」の意義を再確認し、その具体化の必要性を主張する。

キーワード: 東日本大震災、被災地支援、ヴァナキュラーなジェンダー、親族ネットワーク、エンパワメント、当事者性、当事者性の邂逅

0. はじめに 実践者としての自己批判

小論は、2011年3月11日の東日本大震災の被災地である岩手県大船渡市赤崎町における筆者自身の支援実践を検討の土台とするものである¹。筆者は、発災とほぼ同時に被災地支援を開始し、1992年4月に中赤崎復興委員会委員を拝命した。それ以来、阪神・淡路大震災復興過程などから得られた知見や教訓および社会教育・成人学習支援の実践技法を駆使し、被災地内外の多くのボランティアの協力を得て、地域コミュニティのエンパワメント(住民・支援者によって成立する集団の権能の獲得・拡張)を支援・推進してきた。

しかし、そうしたエンパワメントの先に具現化されるべき赤崎町地域の現状は、必ずしも発災当初に被災者や支援者が描いたような理想どおりというわけではない²。津波によって壊滅したまちの中心部の活用計画は頓挫し、地域の新たな産業を誘致する計画も滞っている。なによりも、かつて同地域の複数地区の共有財産であった文化・地域活動が、今は満足に実施できないという状況にある。小地域間の人や動きのつながりが薄れ、かつて存在していた「中赤崎」という人文地理的アイデンティティが失わ

¹ 筆者の関与した被災地支援活動の枠組みとアクションリサーの成果の一部は、松岡(2013)、松岡(2019)に整理されている。

² 大船渡市赤崎町に限られたことではない。復興庁(2023)『復興の現状と今後の取組』(https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-1/202302_genjoutorikumi.pdf) (最終閲覧 2023年2月27日)参照。

れるのではないかととも危惧される。コロナ禍による活動制限や当該自治体の復興施策との衝突・軋轢があったとはいえ、こうした状況の中で、少なからず住民は苦悩・失望という感情を押し殺し諦観のなかで生きているといつてよいであろう。

改めて振り返ると、地域や関係者の力が引き出され重ね合うようなファシリテートができなかったのではないかと自省するところである。小論は、「なぜ、こうした事態に陥ってしまったのか。どこがまちがっていたのだろうか」という筆者自身の自責の念を動機とする。そして、それを、女性のディスエンパワメントおよびジェンダーの脱構築が不十分であったのではないかという観点で批判的に検討し、その克服の方策を探究することを目的とする。

より具体的には、女性と男性のカテゴリーを超えて女性の力が発揮され、あらゆる人の力が重ね合わさるようなサポートができたか、親密圏において形成されている男女の役割と対峙し、その脱構築を進めることができたかを問うということである。いわば、ジェンダーを視軸に、自身が関わってきた復興支援の過程を批判的に省察・検証することが小論の試みである。研究の方法としては、被災地における社会教育的な支援の在り方に関するアクションリサーチによって得られたデータ(フィールドノート、被災者やボランティアのリフレクションシート、アンケート調査結果、フォーマル/インフォーマルヒアリングでデータ)を考察のツールとし、エピソードを組み込みつつ本テーマについて考究する。

1. 復興推進主体としての女性

(1) 女性のエンパワメント

女性の解放運動の集大成である第4回世界女性会議(1995)の北京宣言以後、権限の獲得や社会参加をキーワードとする女性のエンパワメントが重視され社会の様々な層に浸透してきたことは、だれもが首肯し得るところであろう。同年の阪神・淡路大震災以後、被災地の復旧・復興・支援の局面においても、女性のエンパワメントの重要性はさまざまに指摘されてきた(ウィメンズネット・こうべ,1996、相川,2016 など)。

エンパワメントとは「権限や活動する機会を奪われている人たちが、自分たちの生活への統御感を獲得するとともに、自分たちの生活圏での組織的・社会的構造に影響を与える心理－社会的プロセス」(松岡, 2006)と定義される。しかし、一口にエンパワメントと言っても、複数の相・次元がある。経済・文化・政治・社会の各領域によってエンパワメントの内実やプロセスは異なるし、心理－身体的次元、集団・コミュニティの次元、組織の次元、マクロ社会の次元によって強調点や視点も異なる。社会的マイノリティの場合、そうした多様な相・次元での変化のプロセスが総合的なものとして一括され「エンパワメント」と称されることが多い。しかし、逆に、それゆえに、エンパワメントはさほど簡単に生起するものではない。

被災地での女性のエンパワメントに目を向けると、具体的には、以下の場面で論じられることが多い³。①女性ボランティアによる被災直後の救援物資の集配時などの支援活動の場面、②女性による避難所の居住デザイン設計や運営時の場面、③仮設住宅における住民の互いの連絡・協力・調整および集会所の活用などの場面、④各地域の復興計画やまちづくり計画の場面、および、⑤県市レベルの復興計画策定委員会の場面である⁴。まず、本章において、①～③の場면을、以下の各節にて描述し、女性の役割の現実を考究する。

(2) 被災直後の救援物資の集配時などでの女性の役割(場面①)

2021年4月30日に、避難所の一角で全国から食材を集め調理し炊き出しや弁当配食をおこなっていたボランティア団体のリーダー(女性)のKさんから話を聞くことができた。活動をお手伝いしながら「現在の課題」を話題とするインフォーマルな雰囲気の中で、Kさんは、以下のように自身の気づきを語ってくれた。

私は女だけど、炊き出しや配食に携わっている人は男の人が多いのよね。もともと調理師の資格を持

³ 内閣府男女共同参画局『災害時における男女共同参画センターの役割調査報告書』(<https://www.gender.go.jp/policy/saigai/yrep.html>) (最終閲覧 2023年3月6日) 参照

⁴ 大船渡市および赤崎町で筆者が見て取った女性のエンパワメントは①～④が中心であり、⑤については参与観察する立場になかった。

っている人が男性は多いということもあるんだけど、もっと女手がほしい。配食なんかの時に、ふと、『なんで男のボランティアが多いのかな』って思う。女性が入りにくいのかも。でも、うまく動いているけど。

この時、現地に求められるものが危険を伴う力仕事ではないかという固定観念と、力仕事は男のものではないかというジェンダーバイアスが重なった結果として、調理や配食においてさえ女性のボランティアが少なかったようだ。炊き出し活動の外部ボランティアとしては、実は男性が多かったという証言のひとつであるが⁵、私が驚いたのは、Kさんが中華・フレンチ・和食などの男性調理人や多くのボランティアをうまくマネジメントしていたことだ。市民活動の世界での女性の躍進が目覚ましいことを目の当たりにした思いであった。

また、全国から集まった生活物資の仕分け場所であった大船渡市立日頃市中学校の体育館で、筆者が2011年4月末、3日間にわたってボランティアとして活動した際、女性の積極性を感じさせる場面があった。仕分け場所には、近隣の社会福祉協議会からの助っ人である男性職員がマネジメントし、多くのボランティアは男性であった。たしかに段ボールの積み下ろしや移動など力仕事が多かったが、時には女性用の下着や生理用品などを段ボールから取り出しまとめるような作業もある。ところが、災害ボランティアセンターのボランティアコーディネーターは、おそらく他意もなく、「力仕事です。男性の方、よろしくをお願いします」とこの活動への参加募集をしていた。筆者は、共にボランティアとして集う集団に対して、「男性でなくてもいいよね。やれる人は行くべき」と呟いた。すると、うなずいてくれる人も多く、そのなかの一人の女性(20歳代)が「私も行きます」と声を上げた。慌ててボランティアコーディネーターは、「女性でもいいです」と修正したが、ボランティアコーディネーターの例のように、緊急の場面では日常生活では批判的に意識されているであろうジェンダーバイアスが首をもたげてくる。しかし、同時に、ジェンダーバイアスへの批判意識がボランティアに育まれ、女性がこれまでの女性役割を超えて積極的に活動する姿を見ることができた。

(3) 避難所の居住デザイン設計や運営での女性の役割(場面②)

大船渡市には複数の大規模避難所が設置されており、被災後の時間経過と共に避難者の内部の居住デザインや運営方法は変化する。そのため、一概には言うことはできないが、筆者が発災から約1ヵ月半後(4月29日～5月3日)に赤崎町漁村センターにおいて直接視認できたのは、地域婦人会のリーダー集団の活発な動きであった。後日確認したところ、自主防災組織のリーダーら(男性)とともに、寝床・個人スペースの配置、支援物資の分配、調理・片付けの順番などをルール化し、80畳の空間に最大で342名が避難した避難所運営を切り盛りしたという。

避難所閉所(2011年7月)から3か月経った2011年9月に、当時の女性リーダーのひとりであったCさんにインフォーマルにインタビューを行ったところ、「女性は女性で考えた。地域が違ったりしてもそれまでいろんな(地域・文化)活動を通して知り合いだったから、いがみ合うこともあんまりなくて、みんなで協力して暮らせた」と、女性だけのコミュニティが小地域の差を超えて形成された様態を話してくれた⁶。さらに、女性の立場で避難所運営に意見具申することも多々あったようだ。男性のなかに飲酒をする人たちが多い状況に対して、「避難所の外で飲む場所を設けて、そこでだけ飲めるようにしてほしい」という請願を避難所運営リーダーたちに申し出て、いわゆる「飲酒テント」を実現させたという。女性たちは、集団的に、避難所の居住デザイン設計や運営の場面でも力を発揮したようだ。

しかし、他方、男性集団の役割と女性集団のそれを異なるものと捉える性別役割分業の考え方も根強かった。災害対策本部や大船渡市復興局との折衝に女性が口出すことはまったくなかったし、がれきの撤去や燃料確保のための薪割りなどの肉体労働は、明確に男性の役割であった。女性リーダーのひとりのTさんは、「そうしたことは男衆にまかせればいいのよ」と笑いながら答えた。避難所の運営においては、衝突の原因がどのようなものであれ、それを避ける意識は強い。筆者自身も、その話を聞いた時に違和感をもったものの、ジェンダーバイアスを課題として言葉することは避けざるをえなかった。避難所で平穏に暮らしたいと願う人々を前にして、その集団に内在する人間関係の質を外部の人間が批

⁵ 一般に炊き出しにおいては、女性の役割が強調されがちで、女性の無償労働を批判する向きもある(堀久美, 2016)。しかし、炊き出しが外部のボランティアによって行われている場合、男性優位が見て取れるのではないかと。

⁶ 同じ避難所にいた何人かの女性に同じ質問をすると、多くは平穏な暮らしであったと証言するものの、中には「息がつまった。他の人と同じやりかたで料理を作ったりするのは緊張した」と話す人もいた。

判的に言及することは、かなり難しい。ましてや、被災者との信頼関係を築くことが求められる支援の初期段階では、外部者としてこうした違和感を伝えるのは、慎重でなければならない。もちろん、支援者・ファシリテーターは、その違和感を意識し続け、ジェンダーの脱構築に向けて介入することがいずれは求められるが、そのタイミングを見計らうのは容易ではない。

(4) 応急仮設住宅における連絡・協力・調整および集会所における女性の役割(場面③)

2012年6月から、中赤崎地区(赤崎町の中核地域、生形・跡浜・後の入・大洞・山口の5地域のこ)には3つの応急仮設住宅が建設された。後の入北・後の入・山口の三か所である。筆者は、神戸大学(大学院人間発達環境学研究科・神戸大学都市安全研究センター等)や阪神間のNPOからの経済的支援を得て、阪神間の学生・市民によるボランティアチームを組織化し、仮設住宅の生活ニーズに応える活動を主導した。多くの仮設住宅の女性がわれわれの活動に進んで協力してくれ、そのなかで、多くの女性が仮設住宅での暮らしをできるだけ平穏に過ごすために、互いに協力する場面を目撃してきた。また、各仮設住宅のリーダー格の女性たちへのインフォーマルなヒアリングを通して、仮設内のコミュニティ形成における女性の役割の重要性も改めて確認することができた。

後の入仮設住宅のAさんは、各部屋の家族全体の健康状態や生活状態に関する情報を理解しつつ、相互の関わり方について以下のように話してくれた。

ほとんど(家族の状況や生活状態は)わかるけど、知らないふりをしながら、さりげなく手を差し伸べられるかどうかが大切かな(2011年9月17日)⁷

後の入仮設は48戸の家族が12棟に入居する地域最大の応急仮設住宅で、昭和初期の長屋生活に近い環境であった。そこでは、「知らないふりしてさりげなく」が近所付き合いの秘訣であるという。仮設住宅におけるコミュニティの安定的維持のための具体的な行動は、仮設住宅自治会の男衆よりも、むしろ女性たちにかかっていた。罹災証明や復興交付金受領等の市役所での手続きあるいは支援策の利用に関する情報は男衆のリーダーが丁寧に仮設居住者に伝えていたが、生活・福祉に関する相互扶助は、女性同士のつながりによってなされていた。

また、仮設住宅でのボランティアによる訪問活動・便利屋活動などの場面で、丁寧にボランティアと接し具体的なニーズを示してくれたのも女性たちであった。例えば、入居者が屋外で集える庇やベンチの必要性を最初に訴えたのは女性たちで、それに呼応してボランティアが手作りで庇やベンチを作成した。換気扇や部屋の掃除、ゴミ出し、買い物補助などの生活場面での便利屋活動を実質的にコーディネートしてくれたのも彼女たちである。ボランティアは、彼女たちの協力によって「見える化」されたニーズに応じて活動することができた。そして、そうした活動を通して、外部者であるボランティアは「中赤崎」の文化や風習を教わり、どのような復興支援が求められるのかを肌で感じ取ることができた。ある学生ボランティアは、活動後のリフレクションの中で、以下のように記述している。

親戚や屋号のつながりが強いことがわかった。この地域(中赤崎)の死者はそう多くはないけれど(45名/1400人中)、つながりが広く、悲しみは大きい。お話を聞きながら、それがわかった。(2011年5月5日)

また、計画的に戸別ヒアリングも行ったが、被災者が抱く悲しみ、苦しみ、そして、復興への希望や願望は、被災女性たちがセッティングしてくれた支援活動や交流の場面のなかでこそ得られたものが多い。女性中心の活動の中でボランティア活動や支援に必要な構えや態度が作られたといっても過言ではない。

もちろん、仮設住宅でのこのような女性の役割は、土着的なジェンダーバイアスの上に成り立つものであることは言うまでもない。その地域で培われてきた「男らしさ」「女らしさ」に立って発揮された能力に裏打ちされている。それゆえ、逆に、労働・経済または政治の相においては、女性たちの意見や考えは、フォーマルヒアリングでもインフォーマルでも、ほとんど聞くことができなかった。男性が労働や政治の主役という考えが女性集団のなかに深く横たわっていたからであろう。

しかし、ツールがあれば、女性は解放される。女性の特技・能力は、実は労働・経済・政治の相においても大きく貢献した。2012年9月から始まった「赤崎復興市」は、地域の再生を期する食・小物などの販売を中心とした復興マーケットである。赤崎らしい文化を素材にソーシャルビジネスの手法を用い、仮設住宅やみなし仮設住宅の人、あるいは、被災後に大船渡市や赤崎町を離れた人が集える場を作

⁷ ()は筆者補足。以下、引用文内の()は同じ。

ることを目的としたプロジェクトである。この「赤崎復興市」の商品を揃える上で、女性たちの特技・能力が大いに役立った。復興市には、彼女たちの自作の地元の伝統料理や個性的な家庭料理が並び、裁縫技術を生かした小物や家庭菜園の野菜も出品された。各商品は廉価であるが、無償取引ではない。高齢女性たちの中には小金を少しずつ稼ぐことに喜びを感じるようになった人もいたし、2 か月に 1 回程度の頻度で開催される赤崎復興市に出品することを楽しみにする人たちも増えた。未だ中赤崎住民の中でこれを契機に商売を起こした人は見当たらないが、被災者が自力で開始したクッキー屋さんの販促の場でもあったし、津波で商売を停止していた地元の水産加工業者が出店したり、簡単な食事や小物の移動販売をする人たち（必ずしも業者ではない）が地域外から参加したり、あるいは、知的障害者作業所による飲食店が加わったりと、発展の可能性をみせた。赤崎復興市は、たんに地元の人の集いの場というだけではなく、中赤崎の新たな産業を生むきっかけになる可能性が感じられた。

この「赤崎復興市」事業は、土着的なジェンダーのなかで形成された女性の特技・能力が起爆剤となって成り立った企画事例のひとつである。筆者は、こうした女性の力が発揮される場面に遭遇し、当時、地域再生の支援者・ファシリテーターとして、女性の力がさらに異なる場面でも発揮され解放されることに大きな期待を感じた。2013 年 6 月の復興市の後、筆者は以下のようにフィールドノーツ⁸に記している。

やはり、おばあちゃんたちはすごい。口伝でご近所さんをたくさん誘ってくるし、久しぶりの人とも気さくに話している。笑顔がいい。こうしたつながりが広がってくれば、捨てたものではない。(2013 年 6 月 23 日)

女性の力は、土着的なジェンダーに基づくものが多いが、案外、個性的である。それらが被災地の復興の力になるように状況を設定することが、支援者・ファシリテーターの責務または使命である。再認すべきは、災害復興という緊急性の高い非日常的な場面においては、ジェンダーバイアスの結果として形成された女性特有の能力・技術・ふるまいが大きな力となることである。それゆえ、当該コミュニティによって女性が力を発揮し得ると認知されている場面において、より積極的に参加・活動しやすい環境づくりをすることが、支援において、第一に大切にされるべきである。

そうした意味で、女性の参加を促進することを柱とする運動のスタイルは、概ね間違いではない。また、「④各地域の復興計画やまちづくり計画の場面」においても、女性の歴史的・土着的に形成された力がどのように発揮されるかが計画の質に大きく関わる。土着的なジェンダーに依存した活動は、被災前の状況に戻す過程、つまり、復旧・復興においては、その源と理解されなければならない。

しかし、他方、必ずしも女性のそうした力が、必ずしも直接的にまちの創造・新生につながるとは限らない。筆者が中赤崎復興委員となり、その活動を活性化するために行った諸々の介入的支援活動においては、やはり、ジェンダーバイアスは大きな障壁であった。

次章では、「④各地域の復興計画やまちづくり計画の場面」に焦点を当て、女性排除の現実を描述し、ジェンダーバイアスがどのように障壁となるのかを検討する。

2. 女性排除の現実

(1) 目的合理性を高く求められる場面における女性の排除

赤崎復興市の基盤となる「赤崎復興隊」は、中赤崎復興委員会の承認のもと、2012 年 10 月に創設された。それまで中赤崎の復興計画を主導してきた「中赤崎復興委員会」は、中赤崎の 5 地域のリーダー複数名を構成員としたが、いわゆる長老政治であり、全員が男性であった。当時の中赤崎復興委員会委員長であった赤崎地区公民館館長 K さんと筆者を中心に、より多様な住民が復興過程に参加・参画し復興推進の力を増大させることが大切であることを委員会に提案し、新しく、公募・自薦・他薦による多様性の高い住民組織がつくられることとなった。それが「赤崎復興隊」である。

立ち上げの準備として、約 2 か月前に中赤崎住民への全戸調査「希望をつむぐアンケート」を実施した。たんに住民の希望やニーズを調査するのではなく、その作成・回収・分析・報告のすべてのプロセスに多くの住民が関与できるように工夫し、復興隊立ち上げへの理解と協力意識が高まるように配慮した。質問項目作成のために 4 地域（生形地区は消滅していた）の地域公民館およびそれらを束ねる赤崎地区公民館において数回にわたりワークショップを行い、調査票の配布・集約は各地域公民館と関

⁸ フィールドノーツは、現地での活動後に原則として毎日夜にまとめている筆者のメモのことである。

係住民に任せることとした。さらに、その集計結果の公表ワークショップを、各地域において丁寧に実施した。中赤崎の多くの住民が、復興あるいは新生に向けて地域の力を重合させる必要があることを意識する工夫を行ったのである。こうした準備を経て、中赤崎の地域復興計画および復興事業を推進する担い手として、男性 37 名・女性 8 名の計 45 名が初期赤崎復興隊員となった。奇しくも中赤崎の死者数と同じである。65 歳以上は 10 名であった。当時の中赤崎復興委員のほとんどが 65 歳以上であったことを考えると、比較的若い層が集ったといえなくもない。女性に限ると、最年少 26 歳、最高齢 65 歳で、30 歳代、40 歳代、50 歳代の人がバランスよく参加していた。男性に比べて女性の人数が少ないことは残念であったが、中赤崎のジェンダーバイアスを考慮に入れると、初期メンバーとしては「まずまずであった」と、筆者は当時のフィールドノートに記入している。

しかし、赤崎復興隊は、初回より、ジェンダーの壁を感じさせるものとなった。「第 1 回赤崎復興隊のつどい」は、初期メンバーのほぼ全員と大船渡市復興行政中枢職員数名および学生ボランティアが参加し、筆者がファシリテーターを務めた。アイスブレイクやグループワークを組み込みながら社会教育やまちづくり支援のスキルを駆使し、出逢いと希望づくりを中心としたワークショップを実施した。多くの男性や土着的なジェンダーを受容している女性たちにとっては、「課題が整理された」「活動する方向性が見えてきた」「目からうろこ」(参加者のリフレクションシートより)と好意的に評価されたものの、男性と女性の権力構造をいったん緩めることには失敗したといってよい。つどい終了後、筆者が参加者を見送ろうとした時、最年少の女性(R さん・30 歳前半)が筆者に近づき、「こんな人たちと話をするのはいや。申し訳ないけど、私はもう来たくない」と言われたのである。離婚して実家のある中赤崎に帰ってきた女性であるが、グループワークのなかで発言しようとする、ある男性が薄ら笑いを浮かべ馬鹿にしたような目線向け、自分のアイデアを無視した、というのである。後日、他の女性メンバーにこのことについて意見を求めると、「それ(馬鹿にした態度)は私に対してもある。だから、男性の顔色を見ながら受け入れられそうなことを話すしかないのよ」という。

筆者は、先行実践や関連する研究において、男性と女性のグループを分別し、のちに交流させる分離交流型ワークショップの重要性を理解するものであったが、実は、あえて最初から男女混合のグループワークを採用した。その理由は、求められる課題が大船渡市復興行政へのハード面での提案づくりであり、ある程度これまでの政治的交渉の流れと内容を知っている人(男性)がグループをリードすることもやむなし、と考えてしまったからである。もちろん、対等・民主的なグループワークを体感し得るアクティビティを加えたつもりではあったが、土着的なジェンダーバイアスおよびそれと同じくらい強固に底流するエイジズム(年齢主義)をいったん緩め崩すということを安易に考えていたと反省せざるを得ない。復興推進を急ぐあまり、復興隊成立の目的であった「あらゆる人の参加をえながら」ということの困難さとその克服のための介入・作為を軽んじてしまったのである。

結果として、R さんは二度と復興隊に顔を出さず、彼女と同年代の女性が復興隊に参加することもなかった。20～30 歳代の女性の参加・加入に失敗したのである。あの時、同年代の女性でグループワークをすることができれば、事態は大きく変わったかもしれない。実に悔やまれるクロスロードであった。尤も、そうするには、女性の全体的な人数が少なすぎた。反省すべきは、復興計画づくりを目的合理的に進めざるを得ない当時のペースにブレーキをかけ、より丁寧に復興隊の母体づくりを行うことができなかったということであろう。すなわち、地域の女性集団の実態にしっかりと目を向けて、男性集団の陰に隠れている有為な女性たちをじっくりとつなぎ合わせ、その後に復興隊を組織化すべきであった。言い訳になるが、当時の大船渡市復興行政は、小地域の意見を集約することなく計画を策定しようとしていた。とりわけ、「昭和の大合併」(昭和 28～31 年)で併合された赤崎町への配慮は市行政も苦慮しており、それをふまえると、市の復興進度に歩調を合わせつつ赤崎の復興活動を促進することが求められた。それゆえ、あらゆる人の参加をえながら赤崎に合った復興計画を作っていくことを大切にしながらも、実際には、外在的な復興計画策定の進度に適した限定的なメンバーシップのなかでワークショップを進める他なかった。

上位の復興計画や復興活動の進度に適合した支援活動は、目的合理性が高まるがゆえに、女性をはじめ多様な問題や異質なアイデアをもつ人々がプロセスに参加すること自体を排除するという危険性を有している。計画推進者またはファシリテーターの課題は、目的合理性が高く求められる場面において、いかにプロセス合理性の意義を場(被災者・行政関係者)に理解してもらうかということになる。

(2) 地域の権力関係によって分断される女性

筆者が復興における障壁とより強く感じ取ったのは、土着的なジェンダーバイアスそのものというよりも、それが、年齢、所属する親族ネットワーク(または屋号)と密接につながっているということに対してである。一口に地域の女性集団といっても、こうした様々な要素でカテゴリー化され内部に隠然と権力関係が存在している。そこでの葛藤・摩擦の結果として、復興に関連するさまざまな行事・活動・会議への参加が制限される女性が生まれ、地域内権限の高い女性たちのみが復興の特定の局面に関わるという事態が生じていた。復興に関わった女性の年齢・屋号のほとんどは正確には調査できていないが、「〇〇さんは△△の家と親戚」「△△さんは同じ金野姓でも屋号が違うから別」というインフォーマルな口述情報を得ることによって、その女性の社会参加の度合いの理由を納得することができた。

応急仮設住宅でボランティアと頻繁に交流し何かとお世話を焼いてくれていた M さんに赤崎復興隊に入ってくれないかと頼んだとき、「私はそんなじゃない。うちの家はここ(中赤崎)では大したものではないから」と、大げさに手を振って断られた。彼女の親戚ネットワークは中赤崎では規模が小さく、本家は大船渡湾を挟んだ末崎町という地域にあるという。中赤崎では、「金野」「佐々木」「吉田」「田代」「田中」など有力な親族ネットワークがあるが、そのなかでも屋号の違いによって地域内での役割・地位が暗黙裡に定められ、それはいまでも緩やかに存続しているようだ。どうやら、女性は、男性以上にその歴史的に形成されてきた暗黙の地域内役割の影響を受けているように思える。避難所でのリーダーグループや中赤崎に生まれたいくつかの女性ボランティアグループのリーダーたち、あるいは、婦人会の役員は、いずれも歴史的に力のある屋号・親族ネットワーク所属の女性たちである。歴史的かつ土着的な地域内役割が薄れている都市型のまちでは、むしろ、収入・職種・職階の違いの影響を受ける場合が多いが、前近代からの伝統を残している地域、特にそうした現在の知己や形あるもの(家屋など)が破壊された被災地においては、地域内の人的ネットワークに底流する歴史的に形成されてきた地域内役割が、意図的であるか否かは別に、大きな意味をもっている。

能力や意欲の問題ではなく、その女性の所属するネットワークの地域内での位置が、参加の度合いを決定しているのではないのか。つまり、土着的なジェンダーバイアスは、地域内権力と密接につながっており、そのつながりをほぐさない限り、能力や意欲を持った女性の参加は得られないということである。実証的なデータに乏しく、今後、社会学的な調査をすべき課題であるが、このような推測的な仮説抜きには説明できない女性の復興過程へのアンバランスな参加状況が見て取れた。

つまり、ここで大切なのは、ひとりの女性が、ジェンダーだけではなく、複数の問題をめぐる当事者性を有しており、それらがジェンダーと連動することで参加の度合いが決定するのではないのか、ということである。この仮説が正しければ、「あらゆる人の参加を得て」というスローガンを実現するには、ジェンダーバイアスを取り除くというだけではなく、バイアスをより強固にする要素または、それとの連動性をいかに取り除くかが課題となる。

赤崎の復興計画を赤崎復興隊のワークショップの中で作ろうとする場面で、福祉や生活困窮者の視点で独自の意見をもっていた H さんは、その意見をフォーマルには出さない。H さんもまた中赤崎では弱い親族ネットワークに所属している。いつもワークショップが終わってから筆者に近寄り、大勢を決めようとする大きな声の人たち(男性とそれに追従する女性)とは異なる意見を、そっと筆者に耳打ちした。まちづくりのファシリテーターとして、こうした小さな声は大切にしてきたつもりではあるが、話し合いと民主的決定を原則とする公式の場で発言できないでいることは、中赤崎の近未来を予想する計画案の策定過程に否応なく影響し、ややもすると柔軟性のない偏ったプランが作られることになる。現在、中赤崎の被災跡地は、大船渡で人気のある野球のフィールドにするという意見でまとまってしまった。その結果、野球場を誘致する財力のない大船渡市としては、「多目的グラウンド」とは名ばかりの更地に近い状態で土地を放置するほかなくなっている。唯一無二のプランに固執する姿勢は、100 回近く実施した「復興隊のつどい」の中で、代替案を小さな声で発してきた声を聴く姿勢が生まれなかったことが一因ではないかと思うのである。

声なき声をもつ女性たちについては言うまでもない。赤崎の復興計画を示す「赤崎未来予想図」(2013 年 3 月完成)を策定途中に、何度も応急仮設住宅の集会所や地域公民館でそれを披露し意見を求めたが、弱い親族ネットワークに所属する女性や地域での役割をあまり経験していない若い女性(60 歳未満の女性)は、小さなアイデアを出すものの、そうではない女性たちや男性の意見に結果として従うことになることが多かった。

2013 年 1 月に後の入仮設住宅の集会所で行った仮設のおばあちゃん向けに行ったワークショップの中で、そうした弱い女性のひとりである S さんは、ぽつりと「野球場よりも、盛り土をして商店街を復活

させた方がいいのではないか？」という案を出した。しかし、ある男性が、その意見を聞いた途端、「な～にわからないくせに。だまっとれ」と言い放ち、他の人(女性を含む)も様々な理由を付して彼女の意見を無視しようとした。以後、Sさんは復興計画に一切口を挟まなくなってしまう。ある女性リーダーにこの件を相談すると、「あの人(Sさん)はいつもそう。ちょっとおかしいところあるから」と笑ってごまかされた。

Sさんは、中赤崎に親族がなく、大船渡市中心部に友達が多い人だった。たしかに身だしなみがややハイカラで、ふだんから奇抜なアイデアを出す傾向があったが、この件は、復興を進める集団に異質な意見を受け入れる柔軟性がなかったと解すべきであろう。高齢女性であること以上に、地域内での地位がないこと、そして、それをやむを得ないこととして諦観してしまっていたSさんは、まさに、フレイレのいう、社会構造のなかで抑圧され自信を失わせられている「被抑圧者」(フレイレ, 1970)に他ならなかったといえるのではないかな。

復興の過程では、ジェンダーが障壁となることで女性が排除されることは避けられなければならないが、女性集団の内側でも他の要因による排除が存在する。支援者・ファシリテーターは、その要因を意識しつつ、排除の解消と女性の解放の実質化に向けて様々な工夫を懲らさなければならない。抑圧構造が複雑であることを踏まえた上で女性のエンパワメントを促進する姿勢が求められるということである。

3. ヴァナキュラー・ジェンダーの脱構築に向けての方策

(1) ヴァナキュラーなジェンダーとの対峙の必要性

ここまで、まず、土着的に形成されているジェンダーに基づく女性の力の可能性について整理した。さらに、その力が発揮されるには、復興推進の過程を目的合理的なものから変化させることが必要ではないかといふことと、たんに女性のエンパワメントというだけではなく、日常生活における多元的な抑圧構造を視野に入れた女性のエンパワメント支援が必要ではないかという仮説を提示した。

本章では、土着的に形成されているジェンダーを、イリイチのいう「ヴァナキュラリズム(Vernacularism)」と関連させて考察し、ヴァナキュラーなジェンダーの脱構築のプロセスにおいて女性のエンパワメントを進める具体的な方策について論じる⁹。ジェンダー問題を社会構築主義の立場で考える時、制度・慣習として顕在化しているジェンダーバイアスだけではなく、近親・親密圏またはある一定の地域コミュニティに内在するジェンダーへの対峙は不可避な問いとなる。それは、実践を進めていくうえでは特に無視できない課題であり、かつて議論を呼んだ「ヴァナキュラー(Vernacular)なジェンダー」との対峙の仕方といったらよいであろうか。

イリイチがヴァナキュラリズムをその思想の中核の一つとするのは、近代産業社会における「サービス化」への抵抗と人間の主体性の回復をいかに実現するかという問題意識があったからである。ヴァナキュラリズムとは、脱商品的・非集権的・土着的な言語・文化・活動・力を尊重する立場のことをいう。近代産業社会が進む中で人間の生活・活動に関する言語・文化・活動・力などが「交換可能な商品」と化し、それを生み出し変える主体としての人間が疎外されていくことを告発し、土着的・脱権威的な思想としてのヴァナキュラリズムの復権を唱えたのである。

女性の解放を志向する新たなジェンダー(例えば、男女平等)さえも、イリイチにおいては批判の対象となる。近代産業社会におけるジェンダー改変の力学がローカルかつコミュニカティブ(親密な)人間圏におけるジェンダーを侵食する構図は、社会的に弱い立場にある個としての人間が暴力的に変化させられることと同型である。イリイチは、それを近代産業社会の権力・権威による個の主体性への抑圧とみる。鶴見和子らは、イリイチの意図を現実的な運動という観点で捉えたため、近代産業社会が生み出した個の自律・自立という観点から生まれた男女同権・平等の思想を否定するものと批判したが、イリイチが批判するのは、いかなる関係性であれ、それが個人・地域のなかで生き生きとしている男女の関係性をシステムとして侵食することを批判するものであった。

実際、ヴァナキュラーなジェンダーが尊重されなければ、現実の地域での活動は進まない。正義・正論としてジェンダー・イクオリティの原則を前面に出しても、まったく受け付けてもらえなかったり、逆にそれに反発して活動から離脱する人が出てきたり、集団内の対話的な関係が壊れるという事態を招いたりもする。さらに、既に述べたような土着的なジェンダーによって育まれた力を発揮してもらふ機会さえ逸し

⁹ イリイチの主張するヴァナキュラリズムについては、『シャドウ・ワーク』(1982)または『ジェンダー 女と男の世界』(1984)を参照のこと。

てしまうことになる。

もちろん、制度化したヴァナキュラーなジェンダーのために、その逆が、つまり、抑圧された性の社会的排除が生じる場合もあるし、ジェンダー・バランスの適正化を実現すること自体が実践の課題となることもある。それゆえ、ヴァナキュラーなジェンダーを座視し肯定するものではない。

しかし、いずれにせよ、被災地に限らず、各地域・各都市におけるヴァナキュラーなジェンダーが、さまざまな実践に大きな影響を与えることは、当然、実践者・支援者が意識すべきポイントであろう。ヴァナキュラーなジェンダーが土着的コミュニティのルール・生活・文化に密着したものであるがゆえに、それに基づく技や知恵は、性差バイアスという指標ではなく、異なる指標において有益性をもつものと判断されなければならないこともある。イリイチが、産業社会以前において「男手」「女手」とカテゴリー化した、交換価値によっては同定されない人間の個から発する力が、住民・ボランティアの力として被災地支援において求められることは多い。農・漁作業における技や知恵、伝統的文化の作法や技法、あるいは、衝突や紛争を緩和するふるまいは、復興のまちづくりには大きな力となりえる。しかし、それらは、ジェンダー視点で捉えたとジェンダーバイアスの根源と見なされることになる。

したがって、復興活動の推進の中で、その実践共同体として意識すべきなのは、現代社会において推進されるジェンダーの改変・解体への刺戟を、どのようなタイミングでいったん留保し、どのような企画の中でその動きを再始動すべきなのか、ということになる。そうした、いわゆる、按配ともいえる調整のなかで、復興に求められる力が生まれてくる。復興活動を支援・サポートする人間の悩みどころ、迷いどころということができるのではないか。そうした、按配への迷いがどのように復興のプロセスに存在し、具体的な活動に影響したのか、そして、ヴァナキュラーなジェンダーを復興の力に転換するにはどのような具体的な実践が求められるのか、今後の課題であろう。

(2) 「女性」の脱構築の方法

イリイチは、ヴァナキュラーなジェンダーの復権の必要条件として「コンビビアリティ(conviviality)」(自立的共生)を主張したことは、すでによく知られているであろう。制度・規範のなかで閉じ込められている人間が、宴会のような場で自由と自立を取り戻しつつ他者と交流する時空間を、イリイチは「コンビビアリティの高い空間」と呼ぶ。イリイチにあっては、コンビビアリティが高い時空間でヴァナキュラリズムが復権したその先に、どのような商品化されたジェンダーとの葛藤・拮抗関係が生まれ、どのような社会が立ち現れるのかについての明確なビジョンはない。しかし、イリイチの言説をふまえて、自己形成(すなわち学び)と社会形成の関係を一体的にとらえようとする試みもある。そうした試みの一つとして注目されるのが、後藤聡美の研究である。

後藤は、コンビビアリティを「当事者性の邂逅」の発現する時空間と捉え、学習論の観点で検討する。「当事者性の邂逅」とは、「実践に関与・参加する人の複数の当事者性が意図または計画化されずに偶然性を伴って触れ合う」ことである。その問題意識は、ジェンダーバイアスの解消ということではなく、「女性」がそれぞれ多様な家庭・地域・教育・労働のなかで培ってきた多様な力あるいは複数の当事者性を解放させ、社会的な力を再生させ、さらに、社会関係を再編することにある。被災地の復興・再生・新生の過程で求められるのは、当事者性という言葉で置き換えると、女性および男性の複数の当事者性が邂逅し、交差し、新たな推進力が生まれることであろう。その意味で、近代社会が創造したジェンダー規範と、ヴァナキュラーなジェンダーおよびその他の生活的文脈での当事者性との無自覚的かつ一体的な関係のなかにある「女性」が、いったんその呪縛的な関係を弛緩させ、生き生きとした人間としての力が蘇る方法が求められるということである。「女性」というカテゴリー自体の脱構築の方法が求められるといってもよい。

(3) 脱構築の方法としての「当事者性の邂逅」

ここで、当事者性とは何かを改めて整理する。当事者性は、福祉教育・ボランティア学習実践のように「当事者」と呼ばれる人々との関係の中で行われる教育実践において、当事者－非当事者という二項対立図式を超克する試みの中で注目されつつある概念である。筆者は、かつて当事者性を「当事者またはその問題的事象と学習者との距離感」(松岡、2006)と定義し、その交差を学習の本質としたが、後藤はそれを発展させ、「パラドックスとの物理的・心理的距離または関係性」と定義し、その構成要素を以下のように腑分けする(後藤、2021)。

①パラドックスとの身体的なつながりの程度

- ②パラドックスに対する関心の度合い
- ③パラドックスに関する地域・技術の保有の程度
- ④パラドックスをめぐる人間関係の濃度
- ⑤パラドックスに関わろうとする態度・行動の程度
- ⑥(必ずしもパラドックスに囚われない)未来志向性(希望や活動志向性)の方向と程度

そして、「新たな「共同体感覚」を持ち、「仲間」を変え、世界の見方を変える契機」(後藤、2021、p37)として「当事者性の邂逅」を捉える。複数のパラドックスをめぐる当事者性をもつ女性が、他者、すなわち、男性や女性、あるいは、外部からの支援者らと「偶然性を伴って」、その具体的な当事者性の構成要素を互いに接触させ、みずからの当事者性を意識化し、あるいは、知識やスキルを高め、具体的な問題的事象への関りが増してくるということである。後藤にあつては、あるテーマに関する当事者性というよりも、テーマを弁別できていない人間の当事者性を明確にする意図が強く、筆者の「当事者またはある問題的事象」を「パラドックス」に置換し、さらに、⑥を追加する¹⁰。実際、問題やテーマを意識化していない被災地の女性たち(男性もそうであるが)にとって、自身の当事者性に関連する要素を弁別かつ具体的に認識した後に、そこから浮かび上がる問題やテーマが意識化される、と考えるのが妥当であろう。もし各自のテーマが整理されているのであれば、先に示した弱い立場の女性の排除は、より明確な問題として現前化するはずである。各自の持ち前としての、自身の関係の深いテーマや事象・問題が、それが活用される可能性の高い場面で、いかに意識化され共有されるかが課題なのであるから。

つまり、後藤の仮説に従えば、被災地の復興過程において、「女性」が積極的に復興の過程に参加し、その力を十全に発揮するためには、具体的な要素を観点として自身の複数の当事者性を意識し直し、「女性」というカテゴリーをいったん壊すこと、および、他者との接触・交流の中で新たな「共同体感覚」「仲間」を得ることが求められるということである。そして、その契機として「当事者性の邂逅」が生まれるような実践が求められる、ということになる。

その観点で、赤崎における復興過程を再度検証すると、復興計画づくりおよびそれに伴う具体的な地域での活動の創出の過程で、女性をめぐる「当事者性の邂逅」を創発する可能性の高い実践が、実はかなり少なかった、と自省するほかない。発災後、月に一度は「赤崎復興隊のつどい」のために現地を訪問し、そのたびに多くの被災者と直接対面して現状を把握しようと努めてきたが、現地の女性たちが互いに複数の当事者性を自覚するような「邂逅」の場面を創る努力は怠っていた。「邂逅」がなければ、それぞれの持ち前を発揮し、当事者性を交差させることで地域の力を再生させることはできないにもかかわらず、現前する顕在的な地域の力(地域で権限を持った個人や集団の力)に頼った支援をしていた。学生ボランティアと仮設住宅の女性たちの交流は演出できたかもしれないが、被災地の女性同士、あるいは、男性と女性の間での当事者性の邂逅が生まれる場を意識的には創出していなかった。個のエンパワメントではなく、コミュニティ・エンパワメントの技法は、少なからず「当事者性の邂逅」を発露するものであり、その技法を用いた支援は、結果として、当事者性の邂逅を生んだかもしれない。中赤崎全住民へのアンケートの住民参加型の作成・実施・分析、地域行事の再生支援、小地域まちづくり組織の公募化、多様な住民の協力・参加を求める「赤崎復興市」などは、「当事者性の邂逅」を惹起する可能性をもつものではあろう。しかし、ヴァナキュラーなジェンダー、屋号などの親戚ネットワークという排除の原因を取り除くことを想定した「当事者性の邂逅」の場面の創出は、筆者の意識の中に乏しかったと言わざるを得ない。ジェンダーを含む被災地住民を分断する要因を意識した上で「当事者性の邂逅」が発現する場をいかに作るかが、被災地の活力ある復興、すなわち、新生に向けて必要な実践なのであろう。

4. おわりに 支援者に必要な「当事者性の邂逅」

現在を悲観する立場でみずからの支援実践のプロセスを反省的に検証した論稿は、実は、さほど多くない。その理由は、現場に深く関与してきた実践者の多くは、被災地の支援専門家として権力によ

¹⁰ 筆者は、②および⑥は対自化しづらい要素と考え、当初の概念には加えなかったが、人間と社会の同時的変化を捉える指標としては組み込んで然るべきである。ただし、今後実践のなかでどのような指標として具体化するのかが課題であらう。

て祭り上げられ、「成功者」としてふるまうことが期待されたり、その成果を有意なものとして公開することで実践者自らの社会的ポジションを安定させ、さらなる継続的な財源を獲得する必要性に駆られていたりすることにあるのだろうか。被災地支援に限らず、一般的に、ある問題への当事者性が高い実践者は、みずからを公開の場で批判検証する機会は少ない。とりわけ、復興の具体的目標が明確であり集約的に目的合理性の高い支援活動を行う集団に深く関与している人(そこに埋没している人)には、そうした自己批判の機会は、むしろ、煙たいものとして無視したくなるかもしれない。

幸か不幸か、筆者は、「省察的実践者(reflective practitioner)」¹¹としての立場を許される環境にある。阪神・淡路大震災の被災大学である神戸大学は、復興の意味と困難さを深く理解しており、効果や評価に対して即時性を求めない。支援活動を総合的に評価するよりも、やや自虐的に問題がどこにあったのかを探究的に検討することを許してくれるといったらよいであろうか。支援実践をより豊かにするために求められる実践者の「脆さ(vulnerability)」を素直に表出しえる。小論の試みは、そうした環境があればこそのものである。実践者としての自己批判が、今後の被災地支援の現場に少しでも役立つことを願ってやまない。

発災後 12 年が経った今日、筆者自身の、被災地の復興をめぐる当事者性は総体して高まっている。とりわけ、その要素である「被災地との身体的なつながり」「そこで生じている諸問題への関心」「復興に関わる情報・知識の保有の度合い」「復興関連活動への参加の度合い」については、継続的な活動のなかで度合いは高まってきた。しかし、後藤のいう「未来への志向性(希望や活動志向性)」は、必ずしも高いというわけではない。筆者もまた、異なる他者との「当事者性の邂逅」、とりわけ、ヴァナキュラーなジェンダーのなかで異質な力を持つ人々との出会い直しが、今後も求められるということなのであろう。

あるいは、被災者との心理的な同期が高まれば高まるほど、「未来への志向性」が低くなる危険性もある。被災地・復興をテーマとした当事者性の高まりに集中するのではなく、被災地に関係はするけれども、復興とは異なるテーマでの当事者性を高める工夫が、実践者として必要なかもしれない。

いずれにせよ、当事者性の交差・邂逅を基軸とした復興支援の在り方は、今後の大きな研究・実践上の課題である。邂逅ののちに交差が生まれ復興・新生に向けての地域の推進力が高まるとすれば、その方策をより具体的に検討する必要がある。

本研究は、神戸大学基金、神戸大学都市安全研究センター、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成センターおよび科研・基盤研究 C「女性被災者の実感を活かした被災者支援の方法再構築」(代表: 朴木佳緒留)の財源によって実施された複数のアクションリサーチの成果である

引用・参考文献

- 1) 相川康子(2006)「災害とその復興における女性問題の構造～阪神・淡路大震災の事例から～」『国立女性会館研究ジャーナル』p5-14
- 2) 赤崎地区自主防災組織連合会(2013)『赤崎地区 3.11 の記憶～東日本震災から学ぶ～』東海新報社
- 3) イリイチ(1982)『シャドウ・ワーク』岩波書店
- 4) イリイチ(1984)『ジェンダー 女と男の世界』岩波書店
- 5) ウィメンズネット・こうべ(1996)『女たちが語る阪神大震災』木馬書館
- 6) ショーン(2007)『省察的実践とは何か: プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房
- 7) 後藤聡美(2021)「当事者性概念の再考～多文化共生社会の創成に資する学習論の構築に向けて」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 15 巻、第 1 号、p31-40
- 8) 後藤聡美(2022)「多文化交流におけるコンヴィヴィアルな空間の意味 ～＜当事者性の邂逅＞に着目して」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』Vol.39、p53-66
- 9) フレイレ(1979)『被抑圧者の教育学』亜紀書房

¹¹ ショーン(Shön,D.)が用いる実践者概念。実践と省察のループを開放系(インフォーマルな時空間)において展開することを重視する。(ショーン、2007)

- 10) 堀 久美(2016)「被災地の女性が担った“炊き出し”の意義と課題:女性たちへのインタビュー調査より」『女性学研究』Vol.23, p.84-108
- 11) 松岡広路(2006)「福祉教育・ボランティア学習の新機軸ー当事者性・エンパワメント」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 11』p12-32
- 12) 松岡広路(2019)「被災地のエンパワメントを醸成するフィールドワークの在り方〜フレイレアン・アプローチからの探究」日本社会教育学会編『東日本大震災と社会教育』東洋館出版社、p 178-193

筆者: 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授・神戸大学都市安全研究センター協力研究員
(減災人間学)

Issues on the role of women and ways of deconstructing gender in reconstruction activities in the disaster-affected area

Koji Matsuoka

Abstract

The paper examines the challenges of reconstruction support activities from a gender perspective and practical measures to resolve them through observations of involvement in local reconstruction activities immediately after the Great East Japan Earthquake. Based on the findings from the support activities in the town of Akasaki, Ofunato, Iwate Prefecture, the paper lays out the reality of women's roles and exclusion and explains the need for a supporting principle that generates the restoration and reconstruction of vernacular gender. Through critically examining the author's practice, the paper reaffirms the significance of the latest learning theory of social education research, 'intersection and encounter of vernacular gender as "Toujishasei"' and argues for the necessity of its embodiment.

©2023 Research Center for Urban Safety and Security, Kobe University, All rights reserved.